

会長挨拶

～通訳学会設立に寄せて～

新装なった『通訳研究』の特別号をお届けいたします。通訳という専門職は、そもそもわれわれが通訳をするときにいったい何をしているのかという点からして、まだまだ深くは解明されていませんし、ましてや社会でそれがよく理解されているとはとても言えない状態にあります。もちろん、通訳作業のような複雑な人間の活動はその全てが科学的に解明されるということはないでしょう。通訳者は、そうたやすく科学され尽くしてしまうほど簡単なことをしているわけではないと言えるだけの自負は持ってこれに従事しています。どんな専門職もおそらくそうでしょう。にもかかわらず、そしてだからこそ、その中身を解明し、その周辺の事情を明らかにしようという努力はこれから先も、長きにわたって不可欠です。

また、この専門職の作業の内容にたいする社会一般の理解となると、これもおぼつかないものがあります。近年の状況はたとえば 20 年前とはたしかに変わってきているでしょう。通訳職の必要性も認識され、文部省も大学院における通訳者の訓練には積極的だと伝えられています。しかしそれでも、ことばができれば通訳なんてできるという誤解はまだまだなくなっていないどころか、かえって広まっているかもしれません。通訳という職業は大学生の間では大人気ですが、単なる流行かもしれません。

この間に、現実はどんどん先に進みます。放送通訳、司法（法廷）通訳、ボランティア通訳など、新しい形態の通訳作業が盛んになっています。機械通訳の研究も進んでいます。長引く不況のためか、新自由主義の経済思想蔓延のためか、あらたな競争が通訳市場でも起きています。そして日本でも、ここ 10 年ほどにわたって、通訳研究も盛んになってきています。本学会の前身「通訳理論研究会」は 10 年間に 75 回の研究会を開き、そのジャーナル『通訳理論研究』誌を 17 号も発行しました。日本時事英語学会には同時通訳論研究分科会がありますし、そ

KONDO Masaomi, "Presidential Address: On Inauguration of the Japan Association for Interpretation Studies."

Interpretation Studies (Special Issue), December 2000, pages 1-2.

© 2000 by the Japan Association for Interpretation Studies.

の成果も出ています。『通訳事典』(アルク)がここ数年間刊行され、『通訳・翻訳ジャーナル』(イカロス出版)が発刊され、1997年には月刊『言語』(大修館書店)で特集「通訳の科学」が組まれました。手話通訳が通訳の一形態であることの認識もたかまり、手話通訳者の仲間たちの研究・普及活動も活発です。通訳作業に関する単行本も出ています。

こうした通訳研究の隆盛を、質量ともにさらにおし進めていく上で、本誌と本学会は、大きな役割をはたすことが期待されています。また、異言語・異文化間のコミュニケーションを使命とする通訳研究は、国をこえた協力を打ち立てなくてはなりません。こうした任務を、会員およびその理解者とともに、果敢に果たしていこうではありませんか。そのために、おおいに力を出し合おうではありませんか。

最後に、この機会を借りて、通訳理論研究会を支え、本学会設立、本誌発行までにいたったみなさまのご努力に、心からお礼を申し上げ、また、僭越ながら、そうした努力に心から敬意を表したいと思います。学会への移行にも、想像もつかなかったような作業が、現に進行中です。私自身、この特別号が発行されるのを、本当に感無量の思いで迎えています。みなさま、ありがとうございます。

2000年11月19日

日本通訳学会 会長
近藤正臣